

せっかく取り付けた リフトをわざわざ 取り外す施設の話を 聞くと残念でなりません。 私たちのグループ全介護施設では、 無理に持ち上げない介護に取り組んでいます。

事例報告／社会福祉法人甲山福祉センター 特別養護老人ホーム甲寿園（兵庫県西宮市）

天井走行リフト：GH3 ①

問題点

リフトの導入前は、介護技術を高めるこ
とで安楽な移乗を目指していました。一人
でできなければ二人での介助で対応して
いました。二人と聞くと、より安全で、手厚
く良い様にも思えますが、二人介助は息を
合わせることが難しいのです。また、ご利用者
とのコミュニケーションも、1対1より取り辛く、スムーズではなくなります。
加えて、当時の最大の問題は、職員の腰痛・
ぎっくり腰の発症で、職員の80%近くが
腰痛の問題を抱えて、元気な職員がほとん
どいないような状況でした。

発想の転換

まず、このような状況から脱却するため
に、それまでの常識（良質の介助＝アンチ
マシン）から発想転換をして、リフトを機
械ではなく手段だと考えました。リフトに
任せるとかではなく、介助の中心はあくま
で自分たち人間だと考えたのです。リフト使
用時にはご利用者の身体に手を添えること、
必要なときにはご利用者を支えること、
ご利用者に常に声をかけ、ご利用者と私た
ちのコミュニケーション向上を図ること…。こうした発想の転換により、ご利用者が
安心して移乗を受けられる環境づくりと職
員の腰痛問題を同時に解決できたのです。

導入と労働環境の改善

まず、床走行式リフトの導入から始まり
ましたが、当初マンパワーで介助できると、
腕力のある男性職員がリフト使用への抵抗
を示したこともあったようです。その中で
も床走行式リフトの使用頻度や範囲を拡げ
ていき、2001年の南館全面改築の際に天
井走行式リフトを導入しました。私たちの
法人には「西宮すなご医療福祉センター」



もあり、そこでリフトを積極的に活用して
いたことも導入成功の背景にありました。

2009年には介護労働者設備等整備モデ
ル奨励金を活用し、リフト導入と使用環境
の整備を行ない、一人介助でも起居・生活
の場、入浴やトイレなど、可能な限り、ご利用
者の移乗介助ができるようになりました。

労働環境の現状

現在、セカンドライフで初めて介護職
を経験する50歳以上のパートさんが多く
勤めるようになりました。もちろん体力の
ピークは過ぎていますので、リフトの使い
方を習得することで、腰痛やぎっくり腰を
予防しながら働いています。中には70歳
代の方もいますが、リフトがあるから働き
続けられていると言っています。

こういった職場環境であってもリフト介
助の整備の結果、

- ・介護職員の腰痛問題がなくなり、急な介
護職員の不足や離職が発生しづらく、安定
した運営体制が確立した。
- ・介護職員の経験や体力の差を感じさせ
ない効果があった。
- ・ご利用者が抱きかかえ時の表皮剥離の心
配なく介助を受けられるという良い効果が
現れた。

また、ご利用者の生活の維持向上のため
にも24時間いつでも使えるリフト介助は
必要不可欠です。日中は30名ほどの職員
体制が可能ですが、深夜の職員数は少数に
なります。時間によっては仮眠を取る時間
帯もあります。リフトの導入により、深夜
トイレ誘導が必要な方に対しては職員一人
で移乗介助が行えています。

リフトは利用者にとっても介助者にとって
も本当に良いものですが、その一方で、
マンパワーの方が短時間にできることもある

ります。限られた時間が安全かといったせ
めぎ合いは、悩ましいところですが、安心・
安全な移乗を優先に考えています。

現在、当園全床の約70%がリフトの
使用が可能です。できれば全床と考えて
いるので、今後も継続して導入を考えて
います。また、当園内に限らず当法人の
全介護施設にて天井走行リフトを使用して
おり、無理な持ち上げをしない介護に取り組んでいます。

将来

現在、介助ロボットの開発が進んでいる
といった話も耳にする時代になりました。
様々な想いを持つご利用者を始めとして、
私たち使用する者、機器の開発に携わる者
が、安心して活用するための配慮、心遣い、
発想のもとに、人にやさしい機械と一緒に
なって作り上げられたらと思います。

将来、私たちがロボットを使う機会がきて
も、リフト同様機械任せではなく、心をこ
めてご利用者に対応していきます。

■甲山福祉センター理事、特別養護老人ホー
ム甲寿園、施設長
狭間 孝氏



■特別養護老人ホーム
甲寿園、副施設長、介
護福祉士、介護支援専
門員
中野 由理氏

